

社会関係の地平としての 視界の距離空間の形態化について

追手門学院大学 吉 田 正

社会の本質を二人関係にみいびる方向は、G.ジンメルによって用かれ、下リットの現象学的方法にもとづく「我と汝の視界の相互性」の概念へと展開された。それによれば、個人は固有の視界中心から在界の諸契機を弁証法的に統合する構造的全体であり、社会は固有の自我中心に浸透して諸自我より弁証法的統合をなす構造的全体である。我と世界とは、弁証法的に統合された一つの構造的全体の内に、その契機として入っているという理解される。

このような本質関係を基礎として、具体的な社会生活の全貌を解明する方法として、下.ガイガーの試みが行われる。彼は、社会と個人の関連する全体像を二つの視点から構成される像——カタスコピッシュ像とアナスコピッシュ像に分ける。前者は集団の立場から、云々ば上から見られる集団の全体的組織の像であり、後者は個人の立場から、云々ば下から見られる個人の社会生活の全領域の像である。社会と個人の本質論からすれば、二つの像は互いに地平となり、互いに裾野を浸透させあう開放系として捉えられねばならぬが、ガイガーは客観化された指標のみによって、それらを構成したために閉鎖系となってしまう、それらの相互内在の姿が捉えられていない。カタスコピッシュ像は、図式としての社会、地位-役割の体系などといえ換えることができないが、ここでrole playerとして捉えられる成員は、人下から切斷されたホモ・ソシオロジクスではなく、その他の社会領域をアナスコピッシュの地平として生きる主体の一つの表現として理解するべきであると思う。自我は固有の視界中心から社会を遠近法的序列にしただけで体験するのであるから、このような構造をもつ主体の社会化は、社会的役割の内化せしめてホモ・ソシオロジクスに形成することと単純に考えることはできない。自我は初め

にその本質的な構造契機として汝を形態化しているのであるから、社会化は、既に形態化された自我の形態化として、他者との共同の契機をアナスコピッシュな視界に遠近法的に位置づけることを意味するものと考えらる。

以上の理論的考察を基礎として、この研究発表は、社会化の前提であり、結果である対人関係が個人の視界に遠近法的距離に於て、どのように形態化されているかを明らかにしようとするものである。

我々は自己の所有する面識者に対して、近い遠いの距離感を体験している。このような距離体験は、対話に於ける身体間の物理的距離、微妙に表現されるが、普通は意識されない故に非公式的空間と呼ばれる。E.ホールは、人間が他者と対面するときに保つこのような距離を、密接(Intimate)、個体(Personal)、社会(Social)、公衆(Public)と云う四つの距離帯(Zone)に分類している。これらのカテゴリーは、発声、聴覚、視覚、嗅覚、温度感覚などによって空間体験の變化を観察、測定して得られたものである。F.パンは、これらの距離を心的距離(communicative distance)と呼んで、言語表現の仕方によってこれを捉えようとしている。

この発表では、コミュニケーションの距離もさまざまな規定する具体的な状況を綿密に記述することから出発する。これができないから、そこでまず、他者に対して対面しなるときに他者に期待している解釈される理念化されている距離を、相対的な遠近の序列としてグラフに配列した。そしてこれらの距離の序列を類型的に認識するために、ホールの四つの距離帯の概念を借用するとともに、これらの距離帯を特徴づけると思われる指標として、対話の諸形式、一人称と二人称の表われ方、関係の型、身体の姿勢と方向などをあげ、それら

の類型化を試みる。しかし或る面識者がなぜその解釈と位置を占めるに至り、それを明らかにすることは困難である。それを解明するためには、日常生活の正確な記述が要求されるが、とりあえずここでは、その面識者に対して取り得る行為について質問紙法による調査を試みる。

（２）（Ｆ・ボル）は、教育学と実存哲学の支持してこれとそれとを人間の観の一面性を批判して、それらを統合して「連続・非連続的教育形式」を提言している。連続的教育形式は、人間の被陶冶性を前提として、一定の目標に向けて漸次的連続的に形成できる領域に対する形式である。非連続的教育形式は、他者の非連続的介入を必然的契機として実存的主体への覚醒を求めらるものであるが、それは教育者の意図を越える出来事であり、教育の究極的限界的な形式である。覚醒の契機とは他者の介入には、迷いや怠惰から立ちもどることを求める「訓戒、叱責、警告、訴え」、生に決定的な方向転換を与える「出会い」、人間のうちにもどらんとする可能性を呼びさす「実存への呼びかけ」、突然に人間をおそう「啓示」などがあげられる。

これらの教育形式は、対話に於て具体化されるが、対話の形式と内容について性格を異にすると思われる。更に対話の諸形式は、それにふさわしい距離空間を要請する。そこで連続的教育形式は、主として社会—公衆距離に対応する対話の諸形式——公談、対談、討論、講義、報告、講演、演説、審査、審問、インタビュー、協議、交渉など——に担われ、非連続的教育形式は、主として個体—密接距離に対応する対話の諸形式——思索的な対話、告白、相談、雑談、物語りなど——に担われると考える。

このように考えとすると、ホルの四つの距離帯の仮説は、それぞれ空間に対する社会化の必要を認識せしめるのである。この研究は、抽象的な社会化論を教育の具体的な状況の記述へと導くことにより、自明とされて意識されない経験の領域へアプローチし、そこから社会化の問題を問い直そうとする一つの試みである。